

1. ガイドマップの使い方

福生の自然ガイドマップ（河原の生き物編）では、福生市*1を流れる多摩川を中心とした河原やその周辺の自然を紹介しています。

ベースマップには東京都 1/2500 地形図を用い、その上に春夏・秋冬に色分けした植生図をカラーで表現しています。

植生図に直接記入してある生物の名前や記号は、実際に観察できる地点を示しています。観察項目は季節ごとに変化をもたせてあります。春と秋は植物を中心に、夏と冬は動物と地形や水系の情報を主にとりあげました。

図内に書き込まれた観察項目のなかで、その季節の代表的な生物や事象については、写真や図で紹介してあります。

そのほか各季節ごとにいくつかの観察ポイントをコラムとして取り上げました。

なお、この自然ガイドマップは、多摩川河原の現地調査を元に 1995 年現在で作成したものです。川の流路をはじめ、河原の様子は絶えず変動しています。それにともなって観察地点が変化することもありますので注意してください。

注 1：現多摩川は、市の西部の市境を流れ、今回ガイドマップとしてとりあげた多摩川河原には、隣接する羽村市や昭島市、それに対岸のあきる野市や八王子市の市域をも含んでいます。

2. 福生市内での多摩川河原の位置と地形

福生市は、関東山地の奥多摩を源流としている多摩川の中流域に位置し、河岸段丘と沖積地の上に形成されたまちです。

段丘面は、上位から立川段丘、拝島段丘、天ヶ瀬段丘、千ヶ瀬段丘の順になっています。上位の立川段丘と拝島段丘が福生市の面積の大半を

占めていて、天ヶ瀬段丘、千ヶ瀬段丘は、市内の多摩川上流部にみられる小規模な下位段丘です（図）。

段丘には、かつての多摩川が運んできた多くの礫（れき）からなる段丘礫層をとまっています。また、この礫層の下には、百数十万年前の更新世前期に堆積した加住礫層と呼ばれる丸いれきやシルトを含む軟らかい地層が基盤となっています。加住礫層は、多摩川の対岸のあきる野市にみられる加住丘陵を形作っている地層でもあります。現在も、五日市線の鉄橋付近の露頭ではこの礫層が観察できます。

段丘と段丘との境界は明瞭な崖をとまっていることが多いのですが、その崖を段丘崖（はけ）と呼びます。またこの崖の連なりを崖線とも言います。この段丘崖（はけ）と河原には、数は少なくなったとはいえ、まだまだ自然観察のできる豊かな環境が残っています。

3. 河原の自然観察の手引き

〔はじめに〕

ここでは自然観察の方法と、自然観察の具体例について紹介します。しかし、これらはあくまでも参考にするものであって、守らなければならないルールではありません。自然観察のテーマは無限に存在します。型にはまった自然観察をする必要はありません。自由に自然を見る事がすばらしい発見につながります。ぜひ、自分で考えたテーマの自然観察にもチャレンジしてください。

〔計画づくり〕

・テーマ

専門的な知識を得るのが目的であったり、時間に制約がある場合は、テーマを決めておいた方が良いでしょう。また、テーマを決め、興味のある人を募って、グループで出かけるのも楽しいものです。自然観察会などを開催する場合は、テーマに応じた専門家を現地に招いて説明してもらうと、より一層理解が深まるでしょう。しかし、テーマは決めなけ

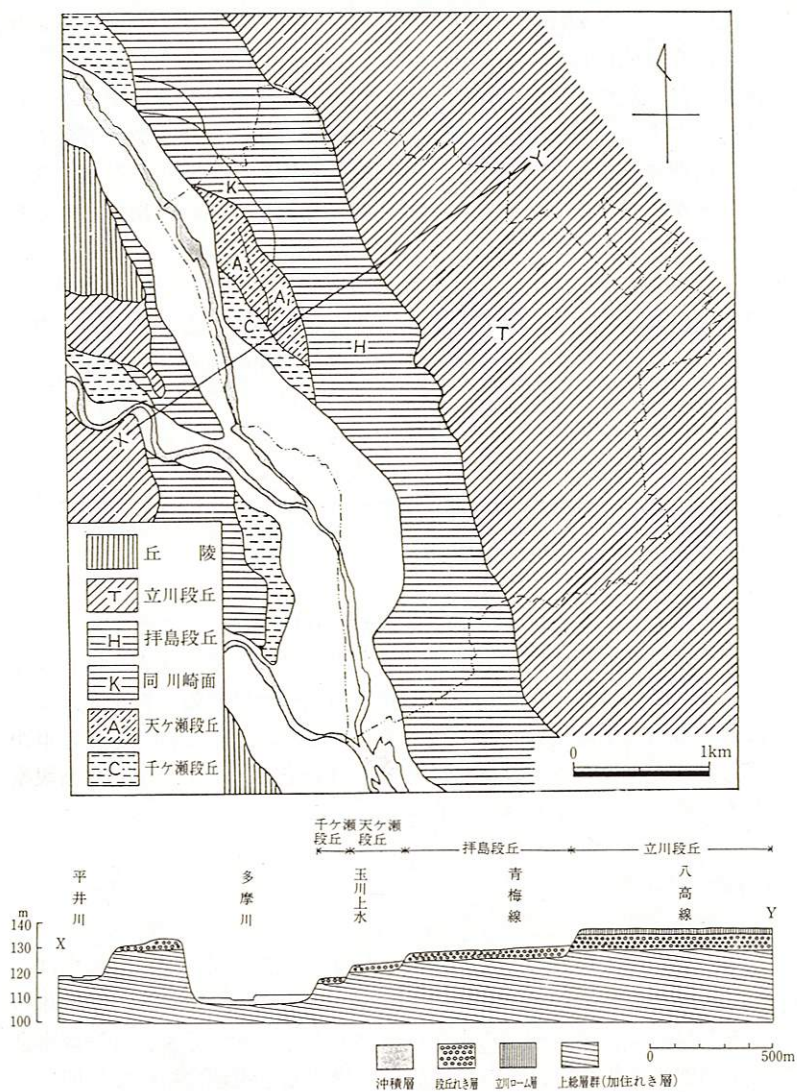


図. 福生市の段丘区分

ればいけないものではありません。河原を自由に歩き回ったり、コースだけ決めておくという方法もあります。

・コース

長い距離を移動する場合は、事前にコースを調べておいた方が良いでしょう。河原には、湿地、池、ササやぶなどの通れない場所があります。また、「対岸にわたりたいのに橋がない」ということにもなりかねません。食事のできる場所やトイレの有無なども調べておけば、いざというときにあわてないで済むでしょう。

・事前勉強

図鑑や関連した本を読んでおくと、今まで気付かなかったものに目が向くようになります。人間は興味がないと、目に映っていても気がつきません。また、生き物などの名前と特徴を覚え、それを見つけたときはうれしいものです。さらに生態に関する知識があれば、その生き物の周囲の環境へと視野が広がります。

〔服装〕

服装は、自然観察をする場所によって異なります。河原の茂みには、刺をもった植物や触れるとかぶれる植物が生えているので、そのような場所では、厚手の長袖の上着と長ズボンを用意した方が良いでしょう。また、植物のタネが衣服にくっつくのを避けるためには、ビニール製の服や雨ガッパが有効です。川を渡ったり、水辺を観察する場合には、その水深に応じて長ぐつやゴム長が必要となります。河原を歩いていると思いがけない所に、湿地や水たまりがあるので、移動用としても長ぐつはおすすめです。雨具の用意も忘れずに。

〔道具〕

双眼鏡 軽くて小さい7～8倍のものがおすすめです。野鳥の観察などに利用します。

フィールドスコープ 双眼鏡では見えない遠くを見たいときに役立ちます。

ルーペ 小さな虫や花の観察に便利です。

カメラ 至近距離から鮮明な写真を撮りたいときは一眼レフのカメラの方がよいでしょう。

メモ帳 雨などでぬれても鉛筆で書ける耐水紙製のメモ帳がおすすめです。

筆記用具 色鉛筆を持っていけば、細かな情報も記載しやすいでしょう。

図鑑 わからない事があったら、その場ですぐ調べるのが一番です。ポケット版の図鑑を持って歩きましょう。

地図 観察地点に印をつけておけば、もう一度来るときに楽です。

メジャー 2m くらいのものがおすすめです。大きさが、生き物の種類を決定するカギとなる事もあります。

スコップ 植物の根や土壌の観察に使います。

ハンマー 石や化石の観察に必需品です。

医療品 河原には刺のある植物が多いので、刺抜きなどを持っていくと便利です。

自然観察会に参加しませんか

公民館では、市内の公園や多摩川など身近な場所で、草花や昆虫そして野鳥などを対象に、年間を通じて12回くらいの「かんさつ会」を開いています。

市民の目で身近な自然の有様を観察し、記録することで、たとえば、河原の自然環境がどのように関係しているかなど、事実を通して理解できます。また、年代を越えて一緒に楽しむことができ、地域の歴史や自然の成り立ちがわかることも魅力です。

皆さんもご一緒に、野外に出てみませんか。お知らせは、毎月2回発行の広報ふっさや公民館ふっさをごらんください。

4. 河原に増えつつある生き物、減りつつある生き物

河川は上流から下流へと流れくだりながら、水の中にある砂などを流すことによって川底の岩や石をけずったり、すり減らしたりしています（侵食作用）。また、川によって運ばれた土砂は、流れのゆるやかなところに集まって河原などを作ります（堆積作用）。川は生き物のように動いていて、毎日少しずつ河原の姿も変化していきます。台風シーズンなどにみられる大雨による増水や、まれにある洪水などでは、川の流路が短い間に大きく変わってしまうこともあります。

また、ダムや堰の建設や河原の護岸工事といった人間の活動は、現代の河川の姿を変化させている最大の原因です。

このような河川をとりまく土地的な環境の変化にともなって、そこに生活する生物相も変化していきます。従って長い期間にわたって同じ場所で生物を観察していると、種数、個体数ともに増減がみられることがあります。

ここでは、多摩川中流域の河原（福生市周辺）で、ここ数年の間に数が増えたり減ったりしている生物を記載しました。なぜ個体数が増減しているのか、考えてみてください。

増えつつある生物

植物

オオブタクサ	コセンダングサ
オオイヌタデ	タチバナモドキ（ピラカンサ）

動物

アオマツムシ	カワウ	コゲラ
ハマシギ	ヒヨドリ	ブルーギル

減りつつある生物

植物

カワラサイコ	セイトカアワダチソウ
カワラノギク	タコノアシ
カワラハハコ	ミクリ

動物

カワラバツタ	ニイニイゼミ	コチドリ
ギリギリス	アマガエル	ヒバリ
トノサマバツタ	イカルチドリ	タヌキ
ヒグラシ	ゴイサギ	

5. 多摩川の水質

「湯水のように使う」というたとえがあるように、私たちは貴重な水を快適な生活と引換にあまりにも大量に使用してきました。私たちの生活を思い浮かべて下さい。洗濯や掃除にきれいな水を使います。きれいな水は、いろいろなものをきれいにする代わりに、ほこりや油で汚れ最終的には川に放流されます。そう考えてみると、私たちが身のまわりをきれいにすることは、きれいな水を汚すことに他ならないのです。

こうして生活に利用された水は、かつては処理されないまま多摩川に放流されてきました。また、飲料水の確保のために、かんがい期（5月20日から9月20日）だけに水が放流されると、福生市を流れる多摩川の水量は極端に減少しました。その結果、河川が本来もっていた浄化作用が低下し、水質は次第に悪化していきました。

昭和43年頃から福生市周辺地域の都市化にともない、多摩川の水質汚染に拍車がかかります。生活排水や工場排水が多量に流れ込んできたのです。多摩川の本流よりも都市下水路から放流される水量の方が多く、多摩川は悪臭の漂う「死の川」へと変わっていきました。このように極度に汚染された状態は、平井川や秋川が合流する地点まで続き、「福生を流れる多摩川は非常にきたない」といわれ、福生の多摩川で川遊びをする人の姿は見られなくなりました。

やがて、昭島に処理場をもつ流域下水道が完成し、福生市および近隣の市町村でも昭和53年には一部地域で公共下水道の使用が可能となりました。今まで処理されずにそのまま排出されていた家庭雑排水は、徐々に公共下水道に放流されはじめ、多摩川を汚し続けてきた都市下水路の排出量は減り続けました。昭和が終わり平成になると、多摩川を真っ白に埋めつくした合成洗剤の泡はほとんど見られなくなりました。平成4年9月、念願であった羽村堰から年間を通しての放流は、福生を流れる多摩川に清流の復活を予感させるものでした。翌年行われた「多摩

表. 都市下水路排水口 BOD の変遷

単位 (mg/l)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
51年度	33.3	18.4	88.7	99.6	26.2	22.6	40.5	24.9	51.4	42.7	54.4	0.3	41.9
52年度	48.2	—	38.2	72.7	17.2	36.7	30.1	—	58.6	46.0	87.0	54.9	49.0
53年度	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54年度	60.6	29.4	42.9	46.6	22.1	—	14.6	45.6	29.2	93.5	48.8	60.0	44.8
55年度	39.0	51.2	31.2	50.9	24.4	76.7	25.6	29.9	41.5	31.2	46.1	20.6	39.0
56年度	33.6	35.9	75.0	55.2	49.8	33.4	57.4	26.2	23.7	15.4	114.0	53.0	47.7
57年度	40.5	40.5	30.7	32.2	—	36.2	39.5	25.4	29.0	52.1	34.3	34.4	35.9
58年度	34.2	37.6	130.0	13.4	26.4	19.1	22.9	41.3	25.0	33.7	38.1	25.6	37.3
59年度	53.1	22.0	35.8	76.2	18.0	15.9	32.1	47.3	32.2	62.4	27.8	41.9	38.7
60年度	65.0	41.3	26.3	11.0	15.0	9.4	15.0	21.8	12.6	22.4	18.1	20.7	23.2
61年度	10.6	12.8	14.6	15.5	16.1	7.2	38.8	9.2	13.6	13.2	20.5	12.9	15.4
62年度	12.2	17.9	5.6	7.9	5.0	11.6	9.0	16.7	15.7	12.0	25.1	19.6	13.2
63年度	9.5	7.2	6.8	6.6	—	4.1	7.8	10.7	10.1	19.5	7.7	11.9	9.3
元年度	6.8	4.7	6.2	6.6	—	3.4	5.0	7.7	12.9	9.5	5.2	7.9	6.3
2年度	5.4	3.3	6.4	8.5	2.4	2.4	5.3	7.2	4.6	7.9	4.9	5.3	5.3
3年度	3.4	4.0	4.0	11.0	13.5	1.6	3.3	7.7	3.7	3.1	5.2	11.0	6.0
4年度	4.7	3.2	5.1	2.0	4.3	6.3	3.2	1.6	3.7	12.5	26.8	5.4	6.6
5年度	6.5	4.9	4.4	3.3	3.1	3.4	5.4	4.2	6.6	8.1	6.0	3.6	5.0
6年度	4.6	15.1	8.3	6.2	5.7	4.2	4.6	6.6	4.3	8.6	5.9	4.7	6.6

川の復権」をテーマとした、TAMA らいふ 21 事業での「どじょうつかみ」や 3,000 匹におよぶ「かじっかの放流」は、改めて、「清流の復活」をアピールしたのではないのでしょうか。また、福生の多摩川では、絶滅したと思われていた「ギバチ」や「カマツカ」も見られるようになり、多摩川の水質は予想以上にきれいになってきたことが分かります。

いままで多摩川を汚し続けてきた都市下水路の BOD（生物化学的酸素要求量）の移り変わりを見てみましょう。いままで、いかに家庭排水が多摩川を汚してきたかわかります。

表. つくし保育園下多摩川の BOD の変遷

単位 (mg/l)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
51 年度													
52 年度	6.5	—	3.0	2.5	1.7	N.D	1.5	—	3.7	5.9	9.2	6.1	4.0
53 年度													
54 年度	3.1	3.1	6.1	2.4	N.D	—	1.4	2.0	1.0	5.6	6.8	7.1	3.5
55 年度	2.8	4.4	16.2	1.8	1.4	3.8	1.0	2.3	3.8	6.6	7.4	13.8	6.5
56 年度	3.8	1.3	5.8	2.4	3.0	2.0	5.6	1.9	3.7	2.1	7.4	8.9	4.0
57 年度	2.3	4.7	1.9	3.0	—	3.2	—	2.1	2.8	2.2	3.7	2.0	2.8
58 年度	0.2	3.0	3.9	2.4	2.1	1.4	1.0	3.1	3.2	5.1	5.4	7.0	3.2
59 年度	4.1	16.1	4.4	3.9	1.6	2.1	1.6	2.3	3.5	4.3	4.3	2.7	4.2
60 年度	3.0	3.4	1.9	N.D	1.4	1.4	2.2	2.0	2.8	3.2	3.3	3.0	2.3
61 年度	2.0	1.5	1.2	1.5	0.2	0.8	1.0	1.3	2.5	1.3	2.0	2.1	1.5
62 年度	3.2	2.0	2.3	2.1	2.4	0.5	1.6	N.D	3.3	3.2	4.2	4.6	2.5
63 年度	3.1	1.9	3.3	2.9	—	0.8	0.5	2.4	2.0	4.2	3.7	3.8	2.6
元年度	2.1	2.2	N.D	2.0	—	0.8	N.D	0.2	0.9	2.4	2.2	1.7	1.3
2 年度	1.7	1.8	1.2	0.6	0.5	1.5	0.8	1.5	1.8	1.8	1.3	1.9	1.4
3 年度	0.7	0.5	0.6	1.2	0.5	0.2	0.2	1.1	0.6	0.7	1.4	0.8	0.7
4 年度	1.4	1.3	1.0	0.6	1.0	1.0	0.6	0.7	1.6	1.2	1.7	1.5	1.1
5 年度	1.4	1.2	1.0	0.8	0.6	0.6	1.1	0.6	1.0	0.8	2.2	1.2	1.0
6 年度	1.5	1.0	1.3	1.0	0.6	0.9	0.5	2.1	0.6	1.4	1.1	3.1	1.3

N.D: 定量下限値以下

一般に河川の汚れの限界は BOD 5 mg/l です。10 mg/l 以上になると悪臭が発生します。

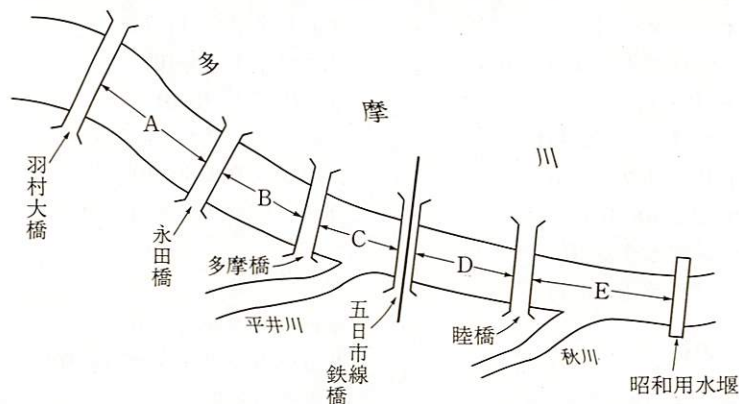
6. 索引・ガイドマップでとりあげた動植物リスト

ここでは、ガイドマップに登場した動植物の一覧を、植物は〈野草〉〈樹木・タケ・ササ〉の順、動物は無せきつい動物〈昆虫・クモ・甲殻類〉、せきつい動物〈魚類・両生類〉〈鳥類〉〈哺乳類〉の順で掲載しています。また、索引としても利用できるようにしました。

凡例は以下の通りです。

凡例

1. 野草は五十音順、次いでその野草が見られる季節ごとに並べてあります。五十音順の（ ）内の数字はその野草の花が観察できる時期を表しています。また、季節ごとの表記では、植物名のあとに、その野草が見られる主な場所をA～Eで示しました（下図を参照）。
2. 樹木・タケ・ササについても五十音順に掲載しました。（ ）内の数字は〈野草〉と同様に、その樹木の花期を示しています。
3. 動物は、無せきつい動物とせきつい動物に分けてリストアップしてあります。ただし、無せきつい動物は節足動物のみをとりあげました。動物もはじめに五十音順、次いで観察できる季節ごとに並べてあります。



〈野草〉

ア行

アマチャヅル (8-9)
アメリカセンダングサ (9-10)
アレチウリ (8-10)
イタドリ (7-9)
イヌキクイモ (7-8)
イヌタデ (6-10)
イヌナズナ (3-6)
ウマノアシガタ (4-5)
エゾノギシギシ (6-9)
エビモ
オオイヌタデ (8-10)
オオイヌノフグリ (3-5)
オオバコ (4-9)
オオフサモ (5-7)
オオブタクサ (2-9)
オオマツヨイグサ (7-8)
オギ (9-10)
オトコヨモギ (8-11)
オドリコソウ (4-6)
オナモミ (8-10)
オランダガラシ (6-7)
オヤブジラミ (6-7)

カ行

ガガイモ (8)

カキドオシ (4-5)
カテンソウ (4-5)
カナムグラ (8-10)
ガマ (6-8)
カラスウリ (8-9)
カラスノエンドウ (3-6)
カワラサイコ (6-8)
カワラナデシコ (7-10)
カワラニガナ (5-8)
カワラノギク (10-11)
カワラハハコ (8-10)
カワラヨモギ (9-10)
キンエノコロ (8-10)
クサノオウ (5-7)
クサヨシ (5-6)
クズ (7-9)
ケアリタソウ (7-11)
コウゾリナ (5-10)
コカナダモ (5-6)
コセンダングサ (8-12)
コボタンヅル (8-9)
コメツブツメクサ (5-7)

サ行

シロツメクサ (4-9)
シロノセンダングサ (9-10)
スギナ (3-5)

ススキ (8-10)
スズメウリ (8-9)
セイタカアワダチソウ (10-11)
セリバヒエンソウ (4-5)
センニンソウ (8-9)

タ行

タコノアシ (8-9)
タチツボスミレ (3-5)
タネツケバナ (3-5)
チガヤ (4-6)
チカラシバ (8-11)
ツルマメ (8-9)
ツルマンネングサ (5-7)
ツルヨシ (8-10)

ナ行

ヌマガヤツリ (8-10)
ノカンゾウ (7-9)

ハ行

ハルジオン (4-6)
ハルノノゲシ (3-10)
ヒガンバナ (9)
ヒメオドリコソウ (4-5)
ヒロハホウキギク (8-10)
ヒロロードモウズイカ (8-9)
ブタクサ (7-10)

ヘクソカズラ (8-9)
ヘビイチゴ (4-6)
ヘラオオバコ (6-8)
ホウキギク (8-10)
ホソアオゲイトウ (11-12)
ホトケノザ (4-6)

マ行

マルバヤハズソウ (7-9)
ミクリ (6-8)
ミゾソバ (7-10)
ムラサキエノコロ (8-11)
メキシコマンネングサ (4-5)
メドハギ (8-10)
メマツヨイグサ (7-9)

ヤ、ラ、ワ行

ヤナギタデ (7-10)
ヤハズソウ (8-9)
ヤブガラシ (6-8)
ヤブカンゾウ (7-8)
ヤブジラミ (5-7)
ユウゲショウ (6-9)
ヨウシュヤマゴボウ (6-9)
ヨモギ (9-10)
レンリソウ (5-7)
ワレモコウ (8-10)

季節別リスト

春

イタドリ A
イヌナズナ CD
ウマノアシガタ A
エゾノギシギシ E
オオイヌノフグリ A
オオバコ A~E
オオフサモ A
オドリコソウ AD
オランダガラシ A~E
カキドオシ C
カテンソウ D
カラスノエンドウ BD
カワラニガナ BE
クサノオウ B
クサヨシ B
コウゾリナ B~D
コメツブツメクサ E
シロツメクサ CE
スギナ CD
セリバヒエンソウ A
タチツボスミレ A
タネツケバナ C
チガヤ ABD
ツルマンネングサ D
ハルジオン D
ハルノノゲシ A
ヒメオドリコソウ C

ヘビイチゴ C
ヘラオオバコ E
ホトケノザ C
メキシコマンネングサ D
ヤブジラミ C
レンリソウ D

夏

アマチャヅル D
イヌキクイモ B~E
イヌタデ D
エゾノギシギシ E
エビモ D
オオイヌタデ BCE
オオフサモ A
オオマツヨイグサ D
オヤブジラミ BC
ガガイモ E
ガマ D
カラスウリ B
カワラサイコ D
カワラナデシコ D
クズ C
ケアリタソウ BE
コカナダモ DE
コボタンヅル D
スズメウリ CD
センニンソウ AD
ツルマメ A

ノカンゾウ C
ビロードモウズイカ D
ヘクソカズラ E
ヘラオオバコ C
ミクリ D
メマツヨイグサ DE
ヤナギタデ E
ヤブガラシ D
ヤブカンゾウ C
ヤブジラミ BC
ユウゲショウ CD
ヨウシュヤマゴボウ BE

秋

アメリカセンダングサ B
アレチウリ ABD
イヌキクイモ B~E
オオイヌタデ AE
オオブタクサ BDE
オギ A~E
オトコヨモギ A
オナモミ DE
カナムグラ ACD
カワラノギク A
カワラハハコ A
カワラヨモギ AD

キンエノコロ AC
クズ C
コセンダングサ AB
コボタンヅル A
シロノセンダングサ B
ススキ A~E
セイタカアワダチソウ AE
センニンソウ A
タコノアシ A
チカラシバ D
ツルヨシ A~C
ヌマガヤツリ C
ヒガンバナ BC
ヒロハホウキギク E
ブタクサ D
ヘクソカズラ BE
ホウキギク B
ホソアオゲイトウ E
マルバヤハズソウ E
ミゾソバ A~C
ムラサキエノコロ E
メドハギ DE
ヤナギタデ E
ヤハズソウ C
ヨモギ C
ワレモコウ A

〈樹木・タケ・ササ〉

ア行

アオキ (3-5)
アカメガシワ (7)
アカメヤナギ (3-4)
アズマネザサ
アケビ (4-5)
アラカシ (4-5)
イヌコリヤナギ (3-5)
イヌシデ (4-5)
エゴノキ (5-6)
エノキ (4-5)
エビヅル (6-8)
オニグルミ (5-6)
オノエヤナギ (3-5)

カ行

キササゲ (6-7)
キツタ (10-11)
クサギ (8-9)
クヌギ (4-5)
クマイチゴ (5-7)
ケヤキ (4-5)
ケンポナシ (6-7)
コゴメヤナギ (4-5)
コナラ (4-5)
コマツナギ (7-8)

サ行

シロダモ (10-11)
スイカズラ (5-6)
スダジイ (5-6)

タ行

タチヤナギ (3-6)
テリハノイバラ (6-7)

ナ行

ナワシロイチゴ (5-6)
ヌルデ (8-9)
ネムノキ (6-7)
ノイバラ (5-6)
ノブドウ (7-8)

ハ行

ハリエンジュ (5-6)

マ、ヤ行

マダケ
ムクノキ (5)
モウソウチク
モミ (5)
ヤブツバキ (2-4)

〈魚類・両生類〉

ア行

アブラハヤ
ウグイ
ウシガエル
オイカワ

カ行

カジカ
カジカガエル
ギバチ
ギンブナ
ゲンゴロウブナ

サ行

シマドジョウ
ジュズカケハゼ

季節別リスト

春

ウシガエル
カジカガエル
ツチガエル
ニホンアカガエル
ヒキガエル

タ行

ツチガエル

ナ行

ニホンアカガエル

ハ行

ヒキガエル
ブラックバス
ブルーギル
ヘラブナ
ホトケドジョウ

マ行

モツゴ

夏

アブラハヤ
ウグイ
オイカワ
カジカ
ギバチ
ギンブナ

ゲンゴロウブナ
シマドジョウ
ジュズカケハゼ
ブラックバス

ブルーギル
ヘラブナ
ホトケドジョウ
モツゴ

〈昆虫・クモ・甲殻類〉

ア行

アオイトトンボ
アオサナエ
アオスジアゲハ
アオマツムシ
アキアカネ
アジアイトトンボ
アブラゼミ
アメリカザリガニ
アメンボ
イチモンジセセリ
イボバツタ
ウスバキトンボ
ウマオイ
ウラゴマダラシジミ
エンマコオロギ
オオアオイトトンボ
オオカマキリ
オナガサナエ
オニヤンマ
オンブバツタ

カ行

カバキコマチグモ (巢)
カナブン
カネタタキ
カワゲラ
カワラバツタ
カンタン
キイトトンボ
キゴシジガバチ
キタテハ
キチョウ
キボシカミキリ
ギンヤンマ
クサキリ
クサヒバリ
クビキリギス
クマゼミ
クルマバツタ
クルマバツタモドキ
クロイトトンボ
クロコガネ
ゲンジボタル

コアオハナムグリ
コオニヤンマ
コガタスズメバチ
コクワガタ
ゴマダラチョウ
コバネイナゴ
コフキトンボ
ゴマダラカミキリ

サ行

サトキマダラヒカゲ
サワガニ
シオカラトンボ
シバスズ
シャチホコガ
ショウジョウトンボ
ショウリョウバッタ
ジョロウグモ
シロテンハナムグリ
セグロアシナガバチ
セグロバッタ
セスジイトンボ
セスジツユムシ

タ行

ダビドサナエ
ツクツクボウシ
ツチイナゴ
ツツレサセコオロギ
ツノトンボ

ツバメシジミ
トノサマバッタ

ナ行

ナガコガネグモ
ナキイナゴ
ニイニイゼミ
ヌマエビ
ノシメトンボ

ハ行

ハグロトンボ
ハネナガイナゴ
ハラオカメコオロギ
ヒグラシ
ヒゲナガカワトビケラ
ヒシバッタ
ヒメアカタテハ
ヒメウラナミジャノメ
ヒメキマダラヒカゲ
フクラスズメ
フタモンアシナガバチ
ベニシジミ

マ行

マダラスズ
マユタテアカネ
ミツカドコオロギ
ミヤマアカネ
ミンミンゼミ

ムラサキシジミ

季節別リスト

夏

アオイトトンボ
アオサナエ
アオスジアゲハ
アキアカネ
アジアイトトンボ
アブラゼミ
アメリカザリガニ
アメンボ
イチモンジセセリ
ウスバキトンボ
ウラゴマダラシジミ
オオアオイトトンボ
オナガサナエ
オニヤンマ
カナブン
カバキコマチグモ (巣)
カワゲラ
キイトトンボ
キゴシジガバチ
キタテハ
キチョウ
キボシカミキリ
ギンヤンマ
クマゼミ

ヤ行

ヤマトシジミ

クロイトトンボ
クロコガネ
ゲンジボタル
コアオハナムグリ
コオニヤンマ
コガタスズメバチ
コクワガタ
コフキトンボ
ゴマダラカミキリ
ゴマダラチョウ
サトキマダラヒカゲ
サワガニ
シオカラトンボ
シャチホコガ
ショウジョウトンボ
ジョロウグモ
シロテンハナムグリ
セグロアシナガバチ
セスジイトトンボ
ダビドサナエ
ツクツクボウシ
ツノトンボ
ツバメシジミ
ナガコガネグモ
ニイニイゼミ
ヌマエビ

ノシメトンボ
ハグロトンボ
ヒグラシ
ヒゲナガカワトビケラ
ヒメアカタテハ
ヒメウラナミジャノメ
ヒメキマダラヒカゲ
フクラスズメ
フタモンアシナガバチ
ベニシジミ
マユタテアカネ
ミヤマアカネ
ミンミンゼミ
ムラサキシジミ
ヤマトシジミ

秋

アオマツムシ
イボバツタ
ウマオイ
エンマコオロギ
オオカマキリ
オンブバツタ

カネタタキ
カワラバツタ
カンタン
クサキリ
クサヒバリ
クビキリギス
クルマバツタ
クルマバツタモドキ
コバネイナゴ
シバスズ
ショウリョウバツタ
セグロバツタ
セスジツユムシ
ツチイナゴ
ツツレサセコオロギ
トノサマバツタ
ナキイナゴ
ハネナガイナゴ
ハラオカメコオロギ
ヒシバツタ
マダラスズ
ミツカドコオロギ

〈鳥類・哺乳類〉

ア行

アオサギ
アオジ

アオバズク
イカル
イカルチドリ
イソシギ

イワツバメ
ウグイス
オオセグロカモメ
オオヨシキリ
オナガ
オナガガモ

カ行

カイツブリ
カシラダカ
カッコウ
カルガモ
カワウ
カワセミ
カワラヒワ
キジ
キジバト
キセキレイ
ゴイサギ
コガモ
コゲラ
コサギ
コチドリ

サ行

ササゴイ
シジュウカラ
シメ
ジョウビタキ
スズメ

セグロカモメ
セグロセキレイ
セッカ

タ行

ダイサギ
タヒバリ
チョウゲンボウ
ツグミ
ツバメ
ドバト
トビ

ナ行

ノスリ

ハ行

ハクセキレイ
ハシビロガモ
ハシブトガラス
ハシボソガラス
ハマシギ
バン
ヒドリガモ
ヒバリ
ヒヨドリ
ホオジロ

マ行

マガモ

ミコアイサ
ムクドリ
モズ

ヤ行

ユリカモメ

季節別リスト

夏

アオバズク
イカルチドリ
イワツバメ
オオヨシキリ
カッコウ
カルガモ
カワラヒワ
キジ
コチドリ
ササゴイ
セッカ
ツバメ
トビ
ハシブトガラス
ハシボソガラス
バン

冬

アオサギ
アオジ
イカル
イカルチドリ
イソシギ

ウグイス
オオセグロカモメ
オナガ
オナガガモ
カイツブリ
カシラダカ
カルガモ
カワウ
カワセミ
カワラヒワ
キジ
キジバト
キセキレイ
ゴイサギ
コガモ
コゲラ
コサギ
シジュウカラ
シメ
ジョウビタキ
スズメ
セグロカモメ
セグロセキレイ
ダイサギ
タヒバリ

チョウゲンボウ
ツグミ
ドバト
トビ
ノスリ
ハクセキレイ
ハシビロガモ
ハシブトガラス
ハシボソガラス
ハマシギ
バン
ヒドリガモ
ヒバリ
ヒヨドリ

ホオジロ
マガモ
ミコアイサ
ムクドリ
モズ
ユリカモメ

イタチ
カヤネズミ
タヌキ
ドブネズミ
ノウサギ
モグラ

ガイドブック・図鑑の紹介

ガイドブック・書誌など

- 「秋川の自然」(1984) 秋川市教育委員会社会教育課編、秋川市
- 「秋留台の自然 残された緑の大地」(1994) 秋川流域自然保護団体協議会編、都政新報社
- 「河川の生物観察ハンドブック」(1976) 川名国男・市田則孝、東洋館出版社
- 「野外観察ハンドブック 新版 校庭の雑草」(1992) 岩瀬徹・川名興・中村俊彦、全国農村教育協会
- 「野外観察ハンドブック 校庭の樹木」(1991) 岩瀬徹・川名興、全国農村教育協会
- 「自然観察ハンドブック」(1994) 日本自然保護協会編、平凡社
- 「指標生物 (新装版)」(1994) 日本自然保護協会編、平凡社
- 「東京の生物史」(1982) 沼田真・小原秀雄編、紀伊國屋書店
- 「多摩川研究観察ガイドブック」(1989) 多摩川研究観察ガイドブック編集委員会編、府中市
- 「多摩川誌」(1986) 多摩川誌編纂委員会編、河川環境管理財団
- 「多摩川の自然 自然ガイドブック」(1981) 多摩川の自然を守る会編、多摩川の自然を守る会
- 「鳴く虫の観察と研究」(1983) 松浦一郎、ニュー・サイエンス社
- 「日野の昆虫ガイドブック」(1982) 日野の自然を守る会編、日野市
- 「福生市史 上巻」(1993) 福生市史編纂委員会編、福生市
- 「福生市史 下巻」(1994) 福生市史編纂委員会編、福生市
- 「水辺の生きもの」(1990) 自然観察ハンドブック編集委員会編、五日市郷土館
- 「福生市の水生生物 ―水生植物・トンボ類―」(1987) 福生市教育委員会編、福生市

図鑑

- 「東京都の蝶」(1991) 西多摩昆虫同好会編、けやき出版
- 「原色日本帰化植物図鑑」(1976) 長田武正、保育社
- 「原色日本昆虫図鑑」(1977) 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇、保育社
- 「新版・日本原色雑草図鑑」(1975) 沼田真・吉沢長人編、全国農村教育協会
- 「日本産トンボ幼虫・成虫検索図鑑」石田昇三・石田勝義・小畑圭三・杉村光俊著、東海大学出版
- 「山溪カラー名鑑 日本の樹木」(1985) 林弥栄、山と溪谷社
- 「フィールド版 日本の野生生物 草本」(1985) 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫、平凡社
- 「フィールド版 日本の野生生物 木本」(1993) 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫、平凡社
- 「山溪カラー名鑑 日本の野草」(1983) 林弥栄、山と溪谷社
- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」(1985) 高野伸二、山と溪谷社